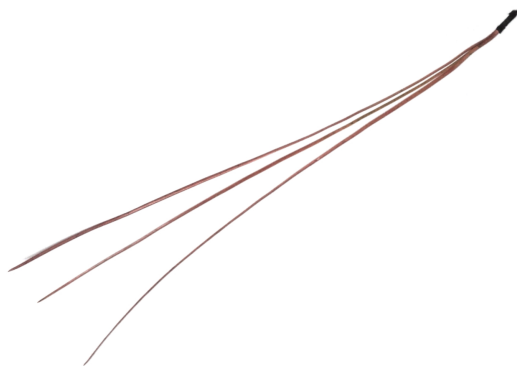


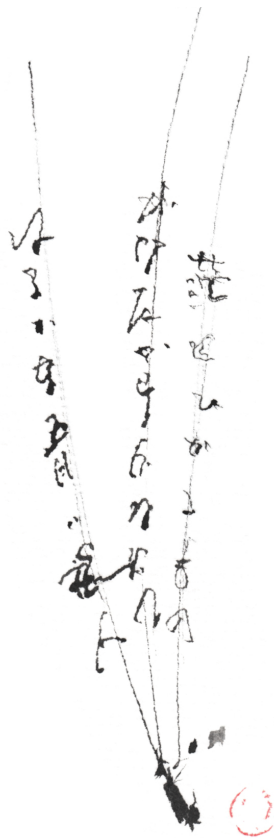
草画帖



第三帖 手毬号



大王松葉 / 表紙 茶筆



大王松の三本葉筆。

新年の夜空の青い旅人（ウィルタネン彗星）。



薺筆。

人日には七草の一つであるナズナで絵か字を描く。



合歡の実の柄の部分で描く。
この世での初笑は赤ん坊の時、誰も覚えてないだろう。



茶筆。
福笑いふうら。



千両筆。

嬉しいことがあると「千両、千両」が口癖の井月という俳人がいた。

六地藏

竹林を背に

六地藏が並ぶ

赤い首掛け

ノコンギク

ここに至る野道には

南アメリカ原産の

ヒロハフウリンホオズキが群生

辺りの田畑では

ケリが遊んでいて

地藏尊には

古銭がお供えしてある

寛永通宝一枚

手毬地蔵

地蔵が立っている

左手に毬をもつて

昔からここで

毬のない子が

毬をつき

歌を知らない子には

地蔵が歌ってくれるという

毬はいつも

地蔵の掌にあり

古くなると

だれかが

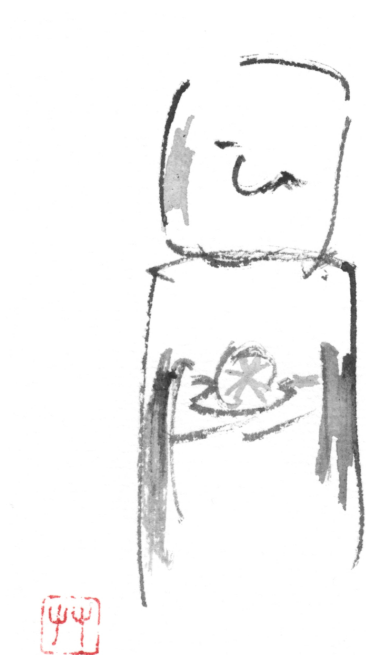
新しいのと取替える

美しい刺繍であつたり

弾むゴム毬であつたり

ときには

地蔵がひとりで遊んでいるという



茶筆。
手毬はふうらのたしなみ。上手も下手も。



茶筆。

鳴く猫に赤ん目をして手まりかな 一茶



万両筆。
新年のころをついて一二三四五六七。



桐筆。
ひふみよいむなやころから。

寒
北
斗
わ
れ
も
一
個
の
疑
問
形

草話

今年の書初めは大王松の松葉と、元日に拾った梅檀の柄を使った。
その内の一枚は巻頭に飾り、「風吟」と書いた反故一枚はとんどの火に焼べた。

いまさら字の上達なんぞを願っているわけではない。陶像の野焼きの時もそうだったが、創作時の気とか精神のようなものが炎となって燃え、次いで煙となつて空へ昇っていくことが願いのだ。

表現する自己をそうして空（天、または世界）につなげて解放する必要がある。あるいは放電とか、アースするような感覚か。

*

草木を筆にして描くということは、案外そういうことかもしれないと、いま気づく。描きながらに世界と自然と通じている。だから心苦しさが無い。呼吸がナチュラルなのだ。むろん、作品の出来栄えはまた別の話。

*

出来栄えは別の話として、字は良寛が手本。
そして手毬。ふうらも良寛から学んでいる。
極意は、ただに一二三四五六七……。茫々。



合歡 芽

俳句 白山鳥翁 / 絵 艸々子 / 詩 泉井小太郎

草画帖 第3号 2019年1月15日 泉井小太郎編集 六角文庫発行

〒675-2312 兵庫県加西市北条町北条1039 Tel 0790-42-6008